様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０２３４０

研究課題名（和文）「演じる行為」に着目した介護の実践価値生成と共有化－職場学習論に基づく分析－

研究課題名（英文）Practical Value Generation and Sharing of Nursing Care focused on `Practice of Acting` -Analysis based on Workplace Learning Theory-

研究代表者
田中　眞希（TANAKA, Maki）

高知県立大学・社会福祉学部・助教

研究者番号：６０３６８８５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、介護職員の「演じる行為」に着目し、介護現場で共有される実践価値を明らかにすることである。介護職員への面接調査から、介護職員は経験を重ねる中で「演じる行為」を活用して利用者に接することが分かった。利用者が職員にさまざまな役割を求めていると認識し、介護職員の個性を活用した役割を演じていた。また、障害者および高齢者施設ともに、利用者に演じて接することは、介護職員に共通する認識であった。さらに、共に働く職員間の対人関係においても、感情コントロールの必要性を感じ、互いに気持ちよく仕事をすることが、利用者へのよい支援につながると考えていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、施設介護職員の実践する「演じる行為」というユニークな方策を取り上げ、その特徴を明らかにしたことに意義がある。本研究で得られた知見は、介護職員の経験から生み出された方策の理論的な根拠を示す可能性から、学術的な創造性を有していると考える。また、人手不足が課題の介護現場において、経験知やケアの方策を根拠に基づく方法論として示すことにより、ケアの質向上に寄与できるものである。

研究成果の概要（英文）：The present study focused on the aspect of “practice of acting” of care workers and aimed to identify practical values shared in the nursing care setting. Through interview surveys of care workers, we identified that in the process of gaining experience, care workers utilized “practice of acting” when interacting with clients. Furthermore, the care workers recognized that clients expected them to play various roles; thus, they acted out the roles making use of their own personalities. In facilities for persons with disabilities and facilities for the elderly, interacting with clients through acting was a common understanding among care workers. In addition, care workers felt the need to control their emotions in interpersonal relationships with co-workers and they considered that working together comfortably leads to better support for clients.

研究分野：介護福祉

キーワード：演じる　介護職員　施設介護　役割　感情コントロール　障害福祉

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究のきっかけは、施設介護職員の役割と利用者との関係について、研究者のディスカッションで出された「施設介護職員は女優であると思う」という発言である。その後、障害者介護や認知症介護の現場において「演じる行為」が行われる事実を確認し、そこには個人の価値観の変容や倫理的葛藤を経た新たな価値の生成があるのではないかという仮定が浮かび上がった。つまり、一般的な介護理論や道徳観とは二律背反を生む可能性のある「役を演じる」という行為は、いわば介護現場の方法論として存在し、多様な介護の場において共有されるという事実に着目したのである。研究代表者らのこれまでの研究テーマから、職業的キャリアあるいは成人学習という視点でとらえた際には、介護現場という職場環境を加味した研究の継続が必要であり、これらを踏まえて本研究における課題の着想に至った。

西尾（2016）は、介護福祉援助における実践価値を利用者本位、自立、自己決定、自己実現と捉え検討した結果、それらの用語は近代個人主義を基盤とした言葉で、要介護者の視点から捉えた価値観とは言えないと述べている。つまり、要介護者と介護職員双方の立場をふまえた実践価値は明確になっていない。実践価値と方法論をつなぐ原理・原則として、杉山（2007：27-28）は、認知症患者は記名力低下がある反面、感情の世界を生きているため、患者の世界と現実のギャップを感じさせないようにすることが重要で、家族介護者が「上手に演技をする」ことが方法の１つであると述べている。このように、「演じる行為」は家族介護の現場では行われているものの、根拠に基づいた分析や実践価値との関係については研究の蓄積がない。一方、障害福祉分野では、介護職員の「演じる行為」について明らかにしたものは見当たらない。

本研究における「演じる行為」とは、介護職員が利用者との関係を築くことを含め、何かを意図して利用者が求める役割を果たそうとすることと定義する。

２．研究の目的

施設介護職員が利用者に対して、介護職員の本来の職務や個性とは異なる「演じる行為」をすることによって、利用者との関係を築くプロセスと介護職員の認識の変化を明らかにする。さらに、「演じる行為」によって構築された介護職員と利用者の関係を手がかりとして、現場で共有される「実践価値」の生成について、職場学習論に基づいて検討することを目的とする。

３．研究の方法

本研究は、介護現場で介護職員が行う「演じる行為」について、介護職員の立場から捉えること、この研究テーマに関する先行研究が非常に少なく、適切な理論や仮説が提示されていないことから、質的帰納的アプローチを用いた。

研究参加の同意を得られた対象者に、利用者に対する「演じる行為」の有無や認識、それらが行われた背景や結果などについて、インタビューガイドを用いた半構造化インタビューを個別面接にて実施した。調査対象者は、障害者施設の介護職員で、比較するために高齢者施設の介護職員を加えて行った。調査で得られたデータから逐語録を作成し、質的分析ソフト MAXqda2018 を用いてコード化を行った。語られた内容と比較検討しながら抽象化作業を進め、コードからサブカテゴリー、さらにカテゴリーを生成した。

表：各調査結果の研究目的および調査内容等の関係

調査結果	研究目的	調査期間	調査対象者	人数	雑誌論文
①	障害者支援施設介護職員の利用者に対する感情コントロールの現状を把握する	2018 年 12 月~2019 年 8 月	障害者支援施設の介護職員	11 人	1 件目
②	障害者入所施設介護職員の「演じる行為」の特徴を明らかにする	2018 年 12 月~2019 年 10 月	障害者入所施設の介護職員	24 人	2 件目
③	高齢者施設介護職員の「演じる行為」の特徴を明らかにする	2020 年 9 月~2021 年 3 月	特別養護老人ホームの介護職員	8 人	未定

４．研究成果

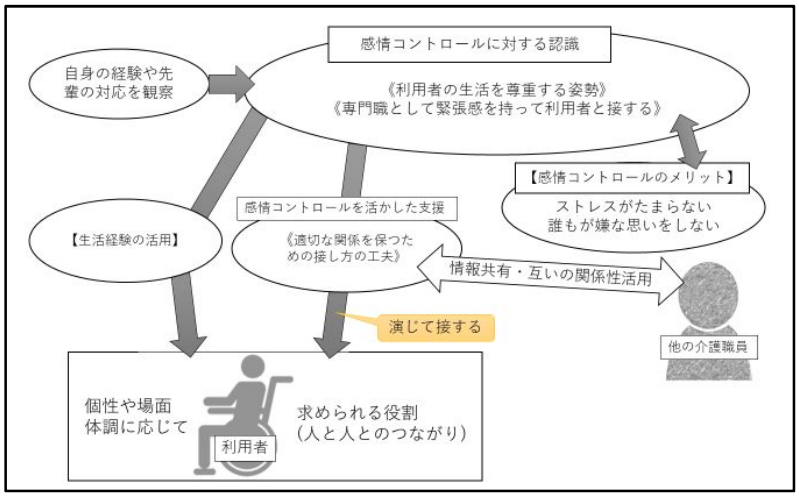
（１）調査結果①

障害者支援施設の介護職員 11 人の逐語録からは、64 のコードと 28 のサブカテゴリー、13 のカテゴリーが抽出された。

分析の結果、介護職員が感情コントロールや「演じる行為」を行った背景は、研修や上司の助言というよりも経験を重ねる中での、利用者との関わり方への工夫であった。演じて接することで、適切な関係を保てることや利用者理解につながること、自身のメンタルヘルスにもよい影響を及ぼしていることが分かった。

そのため、利用者を尊重する姿勢で感情コントロールを行い、また、専門職として緊張感を持って利用者と接していた。さらに、仕事をする上で職員に対する感情コントロールも必要だと認識していることが明らかになった。

Hochschild (1983=2000：4-9)が具体例として挙げている、客室乗務員における感情労働では、不特定多数の対象者に対する一時的な関わりであるのに対し、障害者支援施設の介護職員は特定の人を対象とし、対象者を理解するための十分な期間もある点が異なる。また、利用者と介護職員の関係が、介護福祉分野の中でも長期的な関わりであり、利用者は職員と人と人とのつながりを求めていると、介護職員は認識していた。



図：障害者支援施設の介護職員における感情コントロール及び「演じる行為」の現状（田中・宮上 2020）

発表：雑誌論文１件目

（２）調査結果②

調査結果①で得た 11 人の逐語録を本目的に沿って再分析した結果と、その後行った 13 人の調査結果を合わせて、介護職員の「演じる行為」の特徴という視点でまとめた。障害者入所施設の介護職員 24 人の逐語録からは、93 のコードと 29 のサブカテゴリー、13 のカテゴリーが抽出された。13 のカテゴリーは項目ごとに分類した。

表：障害者入所施設介護職員の「演じる行為」（田中・宮上 2021）

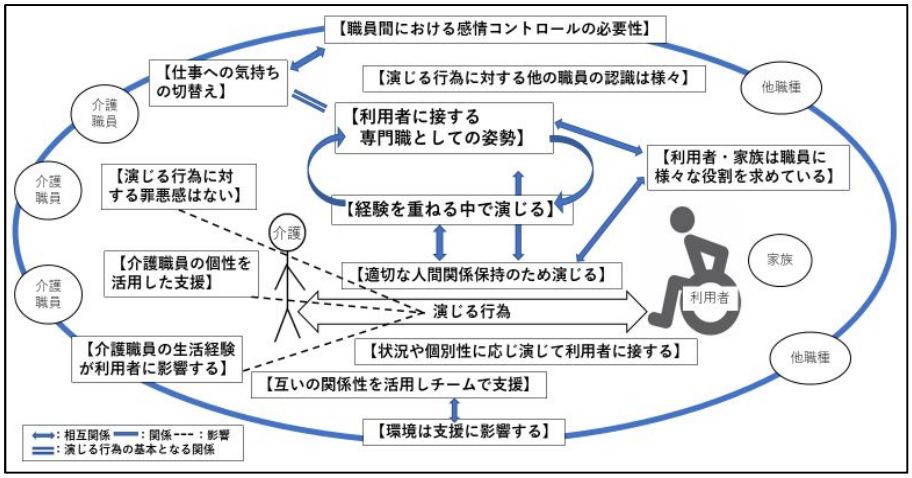
項　　目	【カテゴリー】
「演じる行為」に対する認識	【利用者に接する専門職としての姿勢】 【仕事への気持ちの切替え】 【「演じる行為」に対する罪悪感はない】
「演じる行為」実施の背景と活用	【経験を重ねる中で演じる】 【適切な人間関係保持のため演じる】 【介護職員の生活経験が利用者に影響する】
介護職員としての役割	【状況や個別性に応じ演じて利用者に接する】 【利用者・家族は職員に様々な役割を求めている】 【介護職員の個性を活用した支援】
利用者を取り巻く環境と「演じる行為」	【演じる行為に対する他の職員の認識は様々】 【職員間における感情コントロールの必要性】 【環境は支援に影響する】 【互いの関係性を活用しチームで支援】

介護職員の「演じる行為」の特徴をまとめると、１つは、障害者入所施設の【利用者・家族は職員に様々な役割を求めている】ことである。利用者は、施設という場所で長期間の集団生活を送っている人が多い。そのような中、利用者は介護職員との関わりに人と人との関わりを求めており、介護職員もそれに可能な限り応えたいという思いがあった。２つ目は、【利用者に接する専門職としての姿勢】を意識し、演じて利用者に接していることである。介護職員は介護を行う上で演じる必要性を感じ、緊張感を持って利用者と接するようにしていた。また、利用者が求める役割を演じたい思いと職員としての立場との間で葛藤があった。３つ目は、【環境は支援に影響する】ため、【適切な人間関係保持のため演じる】のように、介護職員が利用者と自身の関係を第三者の視点に配慮して演じている点である。介護職員は、集団生活を維持することを意識し、冷静な態度で利用者に接する場面があることが分かった。また、利用者対介護職員の一対一の関係に加えて、それを見ている他の利用者の視点や実習生などの第三者の視点に配慮して演じて接していた。

以上の結果から、介護職員の「演じる行為」は、職場学習モデル（中原 2010：148）による上司や同僚の支援から学び取ったというよりは、介護職員が利用者との相互作用によって感じ取った、自身に求められている役割を果たすための方策として実践されていることが明らかになった。

この相互作用による「演じる行為」は、人が他者と関わるときに意識的・無意識的を含め、自身に求められている役割を演じて接するというドラマツルギー（Goffman=1974）と類似した様相を示している。

発表：雑誌論文2件目



図：障害者入所施設の介護職員における「演じる行為」の特徴（田中・宮上 2021）

（３）調査結果③

現在調査を継続して実施中で、分析途中の段階である。8人の逐語録から分かっていることとして、特別養護老人ホームの利用者は認知症がある方が多く、判断力の低下が見られる。それゆえ、介護職員は利用者に受け入れてもらうために、伝わりやすい態度で示すような「演じる行為」が求められる。具体的には、笑顔をつくり穏やかな口調でゆっくりと語りかける、接遇マナーに十分配慮した対応などが挙げられた。また、認知症の方が捉えた状況に合わせる必要があるため、現実ではないことを受け入れ、対象者が捉えた世界に合わせて伝えていた。また、不穏状態に陥った際は、気分を変えてもらうために、場面を切り替える演出を行うことも分かった。これらを実践する際、現実ではない嘘を伝えることになるため、入職当初、介護職員には抵抗感があることが分かった。このような「演じる行為」への罪悪感は、利用者が納得する様子を体感するなど、介護職員としての経験を重ねる中で消失していた。

以上の結果から、障害者施設と高齢者施設における介護職員の「演じる行為」を比較すると、対象となる利用者の状態が異なるため、それぞれの対象者に応じた「演じる行為」が行われていることが示された。

今後は、障害者施設と高齢者施設との職場環境による相違について比較検討を行い、職場学習論を参考に考察していく予定である。

発表：未定

<引用文献>

1） 西尾　孝司、介護福祉援助における実践価値の再検討、淑徳大学研究紀要　総合福祉学部・コミュニティ政策学部、50巻、2016、81－98
2） 杉山　孝博、認知症アルツハイマー病介護・ケアに役立つ実践集、2007、主婦の友
3） Hochschild Arlie Russell、The Managed Heart-Commercialization of Human Feeling 、University of California Press、1983（＝石川 准・室伏亜希監訳、管理される心-感情が商品になるとき-、2000、世界思想社）
4） 中原　淳、職場学習論 仕事の学びを科学する、2010、東京大学出版会
5） Goffman Erving、The Presentation of Self in Everyday Life, Doubleday & Company, Inc、1959（＝石黒 毅監訳、Erving Goffmanの社会学１ 行為と演技-日常生活における自己呈示、1974、誠信書房）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 田中眞希・宮上多加子	４．巻 31
２．論文標題 障害者支援施設の介護職員における感情コントロールの現状－演じる行為に着目して－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Humanismus	６．最初と最後の頁 69-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中眞希・宮上多加子	４．巻 70
２．論文標題 障害者入所施設の介護職員における「演じる行為」の特徴	５．発行年 2021年
３．雑誌名 高知県立大学紀要社会福祉学部編	６．最初と最後の頁 67-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 田中眞希・宮上多加子
２．発表標題 障害者施設介護職員の感情コントロール－演じる行為に着目して－
３．学会等名 第27回日本介護福祉学会大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	片岡　妙子 (KATAOKA Taeko) (50783007)	高知県立大学・社会福祉学部・助教 (26401)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	宮上　多加子 (MIYAUE Takako) (90259656)	高知県立大学・社会福祉学部・教授 (26401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関